

『ボリスとグレープについての物語』における語句、 «НЕДОУМЪЮЩЕ, ЯКО ЖЕ БЪ ЛЕПО ПРЕЧЪСТЪНЪ» の解釈について

—— 中世ロシアにおけるキリスト教と異教の融合過程の研究 ——

三 浦 清 美

はじめに

ボリスとグレープは、ロシア国家の黎明期にロシア正教会（コンスタンティノーブル教会キエフ府主教座）で最初に列聖された、ロシアでもっとも代表的な聖者である。ボリスとグレープはウラジーミル聖公の息子たちで、1015年にウラジーミルが死んだのち跡目争いに巻きこまれ、従兄にあたる「呪われた」スヴァトボルクに殺害された。スヴァトボルクが彼らの異母兄ヤロスラフによって倒されたあと、ボリスとグレープは彼らの遺骸がヴィシゴロドに改葬される1072年までに列聖された¹⁾。

1 事件の経緯は、東スラヴ人によって書き継がれた文献においても、19世紀中ごろに成立した近代的な文献学、歴史学においても、本論考の筆者がうえに記したように捉えられてきた。しかしながら、ソビエト時代に Н.Н. イリインの著（*Ильин Н.Н. Летописная статья 6523 года и ее источник, опыт анализа. М., 1957*）が上梓され広く読まれるにつれて、事件史への理解は激変した。Н.Н. イリインは、ロシアの諸資料のほか、メルゼブルグ司教ティートマルの年代記、ポーランドのヤン・ドゥゴシュの年代記、エイムンドルのサガを周到に利用しながら、事件史を再構築した。Н.Н. イリインがもっとも重視したのは、エイムンドルのサガである。それによれば、エイムンドルはノルウェー、ウップランドの王フリングの次男で、ヴァリダマル（ウラジーミル）の死後のガルダリキ（ロシア）に傭兵として入り、ヴァリダマルの2番目の子であったヤリスレイフと結び、その弟プリスレイフを倒した。イリインは、ヤリスレイフをヤロスラフに、プリスレイフをボリスと同定し、ボリスを殺したものがスヴァトボルクではなく、ヤロスラフであったとしたうえで、ボリスとグレープをめぐる一連の作品は、この事実を秘匿するためにヤロスラフの命令で捏造されたと主張した。

この説はソビエト時代に人気を博した。Н.И. ミリュチェンコが述べているように、「この仮説の史料学的な不安定さについては、サガやドイツ年代記の研究者たちが一再ならず指摘している。にもかかわらず、それはソビエトやロシアの人々のあいだで例外的な人気を博し、啓蒙的な文献や大学の教科書にまで入り込んだ」（*Милютенко Н.И. Святые князья-мученики Борис и Глеб. СПб., 2006. С. 7*）。日本でも、福岡星児が「先ず最も注目に値するのはイリインの研究である。ライト・モティーフとしてシャーフマトフの基本的見解の検討およびそれに対する反論のかたちをとっているが、内容的には自由な、広いスケールを持った独創的な労作で、実証的であり説得力も強い」と評価している（福岡星児「ボリスとグレープの物語（訳注及び解説）」『スラヴ研究』第3号、1959年、107頁）。

その後、ソビエト崩壊から15年を経て、2006年に Н.И. ミリュチェンコが前掲書『聖なる公、殉教者ボリスとグレープ』を刊行した。この書はそれ自体が Н.Н. イリインにたいする正面から

一連の事件ののち、殺害の経緯と死後に彼らが起こした奇跡は、『過ぎし年月の物語』における「ボリスの殺害について」の記事⁽²⁾（以下、『年代記』）、『聖なる殉教者ボリスとグレープに捧げる物語と受難と頌詞』⁽³⁾（以下、『物語』）、『聖なるキリストの殉教者ロマンとダヴィデの奇跡に関する物語』⁽⁴⁾（以下、『奇跡にかんする物語』）、『聖なる受難者ボリスとグレープの生涯と死についての説教』⁽⁵⁾（以下、『説教』）、以上の4点の主要作品にまとめられた。それぞれの作品が、小さな異同はあるものの、ほぼ同じ事件の推移と奇跡の内容を記していた。これら作品が一貫性をもって述べたとおり事件が起こったと、筆者は考えている。

本論考で問題とするのは、『物語』におけるグレープの殺害とその遺骸の扱われ方を記述した一節 «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречестьнѣ» である。本論考の目的は、おもに文献学的手法にもとづく多角的な検討をつうじてこの一節に新しい解釈をあたえ、ロシア国家黎明期におけるキリスト教と異教の融合過程の一断面を示すことである。ボリスとグレープ

の異議申し立てである。Н.И. Милутиченкоの論考は2部構成をとり、前半は事件史と史料の文献学的・歴史学的解析にあてられ、後半は主要史料のテキスト翻刻と現代ロシア語訳、注釈からなる。Н.И. Милутиченкоは、Н.Н. Ириинが検討したさまざまな史料について再考しながら、基本的にН.Н. Ириин以前の事件史理解に立ち返っている。ボリスとグレープ崇敬にたいする包括的な著作をもつF.A. シアッカ、G. レーンホフも、事件史について同様の見解を有する。

2 О убьени Борисовѣ // Полное собрание русских летописей (далее ПСРЛ). Т. 1. Стлб. 132–142; Franklin A. Sciacca, “The History of the Cult of Boris and Gleb” (PhD diss., Columbia University, 1985), pp. 104–113; 「ボリスの殺害について」国本哲男、山口巖、中条直樹訳『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987年、149–162頁。

3 Въ тѣ же день съказание и страсть и похвала святою мученику Бориса и Глеба // Памятник литературы древней Руси (далее ПЛДР). XI–начало XII века. М., 1978. С. 278–303; Библиотека литературы древней Руси (далее БЛДР). Т. 1. СПб., 1997. С. 328–251; Милутиченко. Святыя князья-мученики. С. 386–316. これらに掲げられたテキストは、12世紀終わりから13世紀はじめに書かれた『ウスペンスキイ文集』に拠っている（ГИМ, Синод. Собр. № 1063/4; Коткова С.И. Успенский сборник XII–XIII вв. М., 1971. С. 42–57）。

ПЛДР および БЛДР は、テキストの翻刻、注解、現代ロシア語訳がЛ.А. Доміотрієфによってなされている。Милутиченкоの著書では、テキストの翻刻、注解、現代ロシア語訳が著者自身によっておこなわれている。そのほか、英訳と日本語訳がある。Sciacca, “The History,” pp. 3–33; 福岡星児「ボリスとグレープの物語（訳注及び解説）」『スラヴ研究』第3号、1959年、101–124頁；三浦清美「中世ロシア文学図書館（II）聖ボリスと聖グレープにまつわる物語」『電気通信大学紀要』第23巻第1号 [通巻39号]、2011年、45–52頁。

4 Съказание чудесь святою страстотерпцю Христову Романа и Давида // Милутиченко. Святыя князья-мученики. С. 318–345. Н.И. Милутиченкоはこのテキストを、Коткова. Успенский сборник. С. 58–70 に拠っているが、適宜『シリヴェストル文集』Российский государственный архив древних актов (РГАДА), ф. 381 (Син. Тип.), № 53; Сказание о Борисе и Глебе. М., 1985. Т. 1. Факсимильное воспроизведение житийных повестей из Сильвестровского сборника; Т. 2. Научно-справочный аппарат издания. С. 63–89 によって補正を行った。英訳がある。Sciacca, “The History,” pp. 34–58. 日本語訳がある。三浦「中世ロシア文学図書館（II）」52–59頁。

5 Чтение о жизни и о погублении блаженую страстотерпца Бориса и Глеба // Милутиченко. Святыя князья-мученики. С. 356–402. Н.И. Милутиченкоのこのテキストは、『シリヴェストル文集』РГАДА, ф. 381 (Син. Тип.), № 53, л. 89-л, 116.об.) に拠っている。英訳と日本語訳がある。Sciacca, “The History,” pp. 59–103; 三浦「中世ロシア文学図書館（II）」59–71頁。

の列聖という事件の歴史的意義にかんしてはすでに論じたことがある⁽⁶⁾が、本稿では、そのさい十分におこなうことができなかつた文献学的な考察をおこないたい。

文献学の主たる機能を筆者は以下のとおりであると考えている。(α) 用例をできるだけ多く集めて、用法を整理、分類したうえで、その意味を記した「辞書」を作成する。(β) その「辞書」を使ってテキストの意味の把握をおこなう。通常、文献学という言葉が用いられる場合、(α) と (β) の二つのプロセスを指すと考えられる。しかしながら、この「辞書」の使用によって意味を把握できない場合、(γ) 何らかの知的手段を使ってふたたびその意味を探求し、(δ) あらたに把握された意味を「辞書」に登録する、という手続きが許されると筆者は考えている。したがって、「辞書」はつねにテキストにたいして開かれ、更新されている。

本論考でも、(α)、(β) のプロセスの限界を慎重に見極めたうえで、(γ) のステップに入り、(δ) への提言をおこないたい。そのさい、(γ) で導入されるのは歴史学、キリスト教図像学、民俗学、言語学の知見である。ことに民俗学の知見は、中世ロシアの民衆が何を感じ、どう行動してきたのかを理解するための有力な手がかりをあたえてくれる。民俗学の知見の援用は、本稿独自の視点である。

以下、本論考の構成について簡単に触れておく。第1章では、当該の一節 «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» にかんするさまざまな解釈を提示し、いかなる点でこの語句の解釈が難しいかを示す。第2章では、『年代記』、『物語』、『奇跡についての物語』、『説教』、各作品の構造分析とそこにおのずとあらわれる事件の経緯を追い、当該の一節が事件史の構造のなかでどのような位置を占めるかを提示する。第3章から第6章までは、上述した文献学的研究手法で、殺害されたグレープの遺骸が「捨てられた」ことを証明する。これらの章は、グレープの遺骸がどう扱われたかにかんする、中世以来の解釈の揺れを収束させるだろう。第7章では、グレープの遺骸が「捨てられた」ことの意味を、民俗学の知見をあわせて考えることによって明らかにする。この章では、若くして暴力による死を強いられたグレープの遺骸が、中世ロシアの人々によって穢れたものと捉えられたという仮説が提示される。第8章では、ボリスとグレープの奇跡譚のなかに、「崇り」を思わせるエピソードが含まれることを示し、上記の仮説を傍証する。第9章では、ここまでで得られた知見にもとづいて、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ」という語句について、「それが美しく清浄であることがわからなかつた」という新しい解釈を提示し、この一節にキエフ・ルーシにおけるキリスト教と異教の融合の様相が現われていることを示す。「おわりに」においては、ボリスとグレープの列聖という事件がもつ社会文化史的意義について一言する。

1. «НЕДОУМѢЮЩЕ, ЯКО ЖЕ БѢ ЛЕПО ПРЕЧѢСТЬНѢ» をめぐるさまざまな見解

上記にあげたボリスとグレープをめぐる4つの説話の構造については、次章で詳しくあつかうが、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ」という一節が『物語』のどこにあらわれるかについて簡単に説明しておきたい。それは『物語』の終わりに近い部分、すなわち、

6 三浦清美「ボリスとグレープの列聖」『エクフラシス』(早稲田大学ヨーロッパ中世ルネサンス研究所) 第1号、2011年、138-152頁。

ボリスの殺害とその埋葬、グレープの殺害とその遺骸の遺棄、ヤロスラフによるグレープの遺骸の探索が語られたのち、グレープの遺骸をヴィシゴロドのワシーリイ教会に安置する場面であられる。中世ロシア語のテキストを引こう。

① 中世ロシア語のテキスト⁽⁷⁾

И обретоша и иде же бѣша видѣли, и шьдше съ кръсты и съ свѣщами мнѡзѣми и съ кандилы, и съ чѣстїю мно҃гою, и вѣложше вѣ корабль, и пришедше положиша и Вышегородѣ, иде же лежить и тѣло преблаженааго Бориса и раскопавше землю, и тако же положиша и недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ.

引用の部分で文脈を大きく左右すると考えられるのは、「недоумѣюще」という語である。この語は、「не」「до」「умѣюще」という形態素に分解することができ、「умѣюще」「できる」という状態が「до」「十分で」「не」「ない」という解釈をこの語の基層部に見出すことができると思われる。その認識のうえで、各種の辞書がこの語にいかなる意味を掲げているかを見よう。

И.И. スレズネフスキイは、第1の意味として「не постигать」、「не понимать」、第2の意味として「не знать」、「не уметь」をあげている⁽⁸⁾。

『11–17世紀ロシア語辞典』は、第1の意味として「не постигать」、「не в состоянии постигнуть」、第2の意味として「не уметь」、「не в состоянии (что-л. сделать)」、第3の意味として「быть в затруднении, сомнении, нерешительности」、「колебаться」、「не знать (как поступать)」、第4の意味として「не иметь」をあげている⁽⁹⁾。

『中世ロシア語辞典 (11–14世紀)』は、第1の意味として「не понимать чего-л.」、「быть в состоянии недоумения」、第2の意味として「не знать, как выполнить, сделать что-л.」、「быть в затруднении」、「не знать, как поступить」をあげている⁽¹⁰⁾。

類語である現代ロシア語の「недоумевать」には「ためらう」という意味があり、「理解が出来ない」、「納得できない」という否定的なニュアンスが濃厚である。

ここを出発点として、さまざまな研究者がこの一節をどう解釈してきたかを見ることにしよう。

② Л.А. ドミートリエフによる現代ロシア語訳⁽¹¹⁾

И нашли его, где были видения, и, придя туда с крестами, и свечами многими, и с кадилами, торжественно положили Гребя в ладью и, возвратившись, похоронили его в Вышгороде, где лежит тело преблаженного Бориса: раскопав землю, тут и Глеба положили с подобающим почетом.

7 ПЛДР, XI–начало XII века. С. 298; БЛДР. Т. 1. С. 346; Милотенко. Святые князья-мученики. С. 308.

8 «недоумѣти» // Срезневский И.И. Материалы для словаря древнерусского языка. М., 1989.

9 «недоумѣти» // Словарь русского языка XI–XVII вв. М.: Наука, 1986.

10 «недооумѣти» // Словарь древнерусского языка (XI–XIV вв.). М.: Русский язык, 2002.

11 年代順にあげると以下のとおりである。ПЛДР. XI–начало XII века. С. 299; Сказание о Борисе и Глебе. Т. 2. С. 57; БЛДР. Т. 1. С. 347; Милотенко. Святые князья-мученики. С. 309.

Л.А. ドミートリエフは3回このフレーズをうえのように訳し、この訳は Н.И. ミリュチェンコにも忠実に継承されている⁽¹²⁾。該当箇所 «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» はほとんど無視され、かわりに «с подобающим почетом»、すなわち、「しかるべき崇敬の念とともに」とでも日本語訳すべきものとなっている。これは «недоумѣюще» の「できる状態が十分でない」という否定的なニュアンスをまったく汲み取っておらず、過剰な意味と言わなければならない。

次に F. シアツカの英訳を取り上げよう。

③ F. シアツカによる英訳⁽¹³⁾

And they found him where the apparition [had been seen]. And they set out with crosses and with many candles and censers. In great solemnity [his body] was placed in a boat, and they returned and buried him in Višgorod, where the body of the most blessed Boris was also interred. They dug a grave in the earth and buried him there as well, comprehending not how it would be more honorable to do so.

ここでは、「недоумѣюще」が «not comprehending» となっており、「умѣюще」「できる」という状態が «до」「十分で」「не」「ない」というこの語の基層部が解釈に反映されている。下線部は、「どのように（葬ったら）これ以上に名誉ある葬り方になるのか、理解できなかった」とでも日本語訳すべきで、具体的な内容としても、石の柩に納めるとか、柩に金属の塑像や宝石の飾りをつけるなど、いろいろな葬り方があるなかで、これ以上「名誉ある葬り方」を思いつかなかつたのだと考えることができる。

しかしながら、この解釈はあまりにも人工的で不自然である。ただ土のなかに埋める以上の名誉ある葬り方は、前述のようにいくらでも考えられるが、実際は地面を掘って埋めただけである。また、「more honorable」と訳することは、「пречѣстьнѣ」を比較級に解釈することを前提としているが、中世ロシア語において形容詞の男性・単数・主格比較級は通常ならば «пречѣстьнѣи» だから⁽¹⁴⁾、この解釈はあきらかに考えすぎであるといわなくてはならない。

次に福岡星児による日本語訳を検討してみよう。

④ 福岡星児による日本語訳⁽¹⁵⁾

彼らは人が見たというその場所で彼を発見したのである。一行は十字架を捧持し、礼を厚くして進み、彼を舟の中に横たえ、帰って来て、ヴィシュゴロドの至福を享けたボリースの遺体が横たわっている同じ場所に彼を葬った。土を掘り、あらためて彼を埋葬したが、そのうるわしく神々しいばかりであるのを訝った。

12 Милютенко. Святые князья-мученики. С. 309.

13 Sciacca, "The History," pp. 28–29.

14 ヴィノクル（石田修一訳編）『ロシア語の歴史』吾妻書房、1996年、353–355頁。

15 福岡「ボリース」122頁。

«недоумѣюще»が「訝った」となっている。『日本国語大辞典』で、「いぶかる」は、第1の意味として「はっきりしないので気がかりに思う」、「おぼつかなく思う」、第2の意味として「いきどおる」、「怒り狂う」、第3の意味として「あやしく思う」、「不審に思う」、「疑う」があげられている⁽¹⁶⁾。だから、訳語「訝った」は、「недоумѣюще」の、「умѣюще」「できる」という状態が«до»「十分で」「не»「ない」というこの語の基層部を十分に反映しているといえる。

では、下線部の文脈を見たとき、どのような意味になるだろうか。「そのうるわしく神々しいばかりであるのを訝った」は、「そのうるわしく神々しいのを、はっきりしないので気がかりに思った」ということになり、下線部箇所の意味だけを見たとき、「うるわしく神々しいことに疑問がもたれた」ということになりそうだが、はたしてそう理解してよいだろうか。

福岡星児はそうではなく、むしろ「訝った」に「驚いた」の意味を含ませ、「うるわしく神々しいことに驚いた」のだと解釈し、グレープの遺骸に奇跡が起こったと考えたのだと思われる。しかしながら、この解釈にはアポリアが隠されている。さきに示したように、日本語において「訝る」には「驚く」という動的な意味がまったくない。むしろ、それは「はっきりしないので気がかりにおもう」というまったく逆の、曖昧さをふくむ意味である。一方で、もしそこに（日本語として正しくなくても）あえて「驚く」という含意を読みとった場合、中世ロシア語«недоумѣюще」の曖昧さをふくむはずの意味の基層部がどこかに消えてしまう。

このように見ると、日本語訳の場合、「訝った」、「とまどった」という訳語によってごまかされてきたものがあると指摘しなければならない。筆者が示したように、現代ロシア語訳、英訳、日本語訳すべてがそれぞれに欠陥をもっている。なお、И.И. スレズネフスキイ、『11-17世紀ロシア語辞典』、『中世ロシア語辞典（11-14世紀）』の訳語と用例を見ても明らかなどおり、「недоумѣти」という動詞が、不可思議な出来事を目にした人々の反応を描くときによく用いられる表現であるということもありえない。

以上の考察から、「недоумѣюще, яко же бѣъ лепо пречѣстьнѣъ」という語句に適切な解釈をあたえるには、従来の見解から離れることが必要である。むしろ視野を大きくとって、『物語』全体の構造、ひいては、『年代記』、『説教』もふくめ、ボリスとグレープをめぐる諸作品から浮かび上がってくる事件史の全体像のなかで、この箇所がいかなる位置を占めるのかが検討されなくてはならない。

2. ボリスとグレープ殺害事件の推移

本章では、『年代記』、『物語』、『説教』のプロットを比較対照し、その共通点、相違点を数えあげ、三つの作品の比較対照から浮かび上がってくる事件史の全体像を検討する。この考察は、「недоумѣюще, яко же бѣъ лепо пречѣстьнѣъ」という一節が、事件史のなかで占める位置について示唆をあたえるだろう。

16 「いぶかる」『日本国語大辞典』小学館、1972年。

『年代記』、『物語』、『説教』で共通する事件の経緯は以下（【A】）のとおりである。

【A】

- ① ウラジーミルの死後、スヴァトポルクがキエフ大公位に即いた。
- ② ボリスが敵の討伐のために兵をあたえられていたが、この部隊をスヴァトポルクに対抗するために使わなかった。
- ③ ボリスはスヴァトポルクによって遣わされた刺客によって殺された。そのさい、
- ④ 自らの死を予期したボリスが、死から免れるように神に祈った。その後、
- ⑤ 死の直前の祈りにおいて、自らの死をキリストの磔刑と準えて過酷な運命を受け入れた。
- ⑥ ボリスの死にさいして、ボリスに愛された若い侍従がボリスをかばって殺された。
- ⑦ ボリスの死は、1015年7月24日のことであった。
- ⑧ ボリスの遺骸は、ヴィシゴロドに運ばれ、聖ワシーリイ聖堂に葬られた。
- ⑨ スヴァトポルクは、グレープに刺客を送った。
- ⑩ グレープはスヴァトポルクの放った刺客によって船のなかで殺された。
- ⑪ 直接に手を下したのはグレープづきの料理人だった。
- ⑫ グレープの殺害は、1015年9月5日のことであった。
- ⑬ グレープの遺骸は、川岸（『年代記』）、あるいは、荒野（『物語』）の二本の丸太のあいだ、もしくは、荒野の丸太のした（『説教』）に捨てられた。
- ⑭ スヴァトポルクによるボリスとグレープ殺害は、旧約聖書『創世記』のカインによるアベル殺害とのはっきりとした類比において捉えられている。二つの類比は、おのおのの作品のなかで、手を変え品を変えて繰り返し言及されている。

以上述べた14点の事柄は三つの作品の類似点として特筆すべきである。その一方で、『説教』が、他の二つの作品と明瞭に性格を異にしていること、『年代記』と『物語』はたがいにかかなり似通っていることを指摘しておく。『説教』にはあらわれず、『年代記』と『物語』に共通し、事件に具象性をあたえている部分を見てみることにしよう。それは以下（【B】）のとおりである。

【B】

- ① ボリスがウラジーミルより兵をあたえられてあたる敵は、ペチェネーグ人だった。
- ② ウラジーミルはキエフ郊外の別邸ベレストヴォで死んだ。スヴァトポルクはその死を隠し、その遺骸はベレストヴォの邸の床板をはがして作った穴から、絨毯にくるまれて綱で地面につり降ろされて、橇で運ばれ、聖母教会に安置された。
- ③ スヴァトポルクはプシチャをはじめとするヴィシゴロド市民とボリス殺害の陰謀をめぐらせた。
- ④ ボリスをかばって殺された侍従は、ウグリ（ハンガリー）人の子ゲオルギイであり、その首にはボリスによって褒美としてあたえられた金の首輪がつけられていた。刺客たちはそれを奪うためにゲオルギイの首を切り落とした。

- ⑤ ボリスの身体は荷車によって運ばれたが、途中で息を吹き返したので、あらたに二人のヴァリヤーグ人（ヴァイキング）の刺客が送られ、止めが刺された。
- ⑥ スヴァトポルクは、すでに死んだウラジーミルが重病であると嘘をつき、グレープを呼び寄せた。
- ⑦ グレープがヴォルガに来たとき、野原で馬がつかずき、その足が少し傷ついた。その後、スモレンスクに来て暗いうちに（見えるところに）スモレンスクを出発し、スミヤジノ川の船のなかにいた。
- ⑧ ノヴゴロドにいるヤロスラフに、母を同じくする妹ペレドスラフからウラジーミルとボリスの死の知らせが届いていた。ヤロスラフはグレープにスヴァトポルクの刺客が近づいていることを警告した。
- ⑨ グレープは逃亡せず、父と兄の死を嘆いた。嘆きのさなか、スヴァトポルクから送られた刺客がグレープの乗った船に追いついた。
- ⑩ 刺客のリーダー格の人物はゴリャセルという名で、その命令によってグレープの喉をナイフで掻き切ったグレープづきの料理人の名前はトルチンであった。

次に、『年代記』にのみあらわれるディテール、『物語』にのみあらわれるモチーフとディテールがあるので見てみよう。以下の3点（【C】）が『年代記』のみにあらわれる。

【C】

- ① スヴァトポルクはキエフ大公位につくと、キエフの町の人々に贈り物を送って歓心を買おうとした。
- ② ボリスの暗殺にかかわったヴィシゴロドの住人は、プチシャ、タレツ、エロヴィチ、リャシェンコであり、ボリス殺害の顛末をスヴァトポルクに報告した。
- ③ 刺客たちは、スヴァトポルクにグレープ殺害の顛末を報告した。この記述は『説教』と共通している。

以下の4点（【D】）は、『説教』、『年代記』とは共有されず『物語』のみにあらわれ、『物語』を文学作品として優れたものにするに寄与している。

【D】

- ① スヴァトポルクの出生にまつわるエピソードが語られている。スヴァトポルクは実は、ウラジーミルが殺したその兄ヤロポルクが修道女に産ませた子であった。
- ② ボリスがスヴァトポルクへの抵抗を諦める箇所が、ボリスの直接話法で具体的に描かれている。「主イエス・キリストさま！人間の姿をして地に現われ、自らの意志によって自らを十字架に釘で打ちつけ、われらの罪を背負って受難を受けた方よ、私もあなたのように受難を被るのにふさわしいものとしてください。」
- ③ ボリスを殺したスヴァトポルクがさらにグレープ殺害を決意するときに心境があらわに述べられている。

- ④ グレープは殺されるときに、刺客たちにたいして命乞いをしている。その生々しさは、この作品を文学的に優れたものにしている。「私の若さをかわいそうだと思ってください。情けをかけてください。命幼き私を殺さないでください。いまだ熟さない穂を刈り取らないでください。まだ母の乳にぬれたままの私を。」

以上のとおり、『年代記』の叙述がより簡潔でより客観的であり、『物語』がより主観性を重んじ、表現的であることが一目瞭然である。これら二つの作品、『年代記』と『物語』に比して、『説教』はあくまで説教であり、聖書のエピソードが盛んに引用され、ビザンツ伝来の聖者伝の様式からの逸脱がきわめて少ない。作品冒頭のかかなりの部分が、旧約聖書『創世記』の情欲と兄弟殺しにかんする諸エピソードの叙述のために費やされ、文学作品としての躍動感とはしかに欠ける。

しかしながら、【A】で見られたように、事件の推移がしっかりと押さえられていることには注意を払うべきであろう。それに加えて、『説教』のみが伝える事件のディテールが二つある。それは以下（【E】）のとおりである。

【E】

- ① スヴァトボルクがキエフ大公位につくと、グレープは北の国の兄のもとに逃れようとした。北の国とはどこか、兄とは誰かについて具体的には述べられていないが、H. И. Милрюチェнкоは「兄」とはあきらかにヤロスラフを指すと指摘している。⁽¹⁷⁾
- ② ウラジーミルからボリスにあたえられた兵は、完全武装した八千の軍勢であった。

【A】から【E】までに挙げた話素はたがいに矛盾せず、逆に相互補完的で、【A】に示されたあらすじに、【B】、【C】、【E】のディテールが加えられて事件の全体像が立ち現われてくるように思われる。【D】は事件を臨場感とともに描き出すために、『物語』のテキストに一定の脚色（内面の描写）をあたえているが、【A】によって示される事件の経緯を少しも歪曲してはいない。

『物語』と『説教』では、【A】のあとにさらに叙述がつづく。そもそも『説教』は、事件の顛末をあつかった前半部分、聖ボリスと聖グレープが死後に起こした奇跡をあつかった後半部分にわかれ、その前半部分に対応するのが『物語』、後半部分に対応するのが『奇跡にかんする物語』である。ここで検討しようとするのは、『物語』と『説教』前半の奇跡をあつかう部分で、共通点と相違点は以下（【F】）のとおりである。

【F】

- ① 遺骸はそのまま長いあいだ放置されていたが、腐敗を免れて無傷のままであった。『説教』では、「獣に食われたり、鳥についばまれたりしなかった」と書かれている。
- ② 遺骸のまわりで、さまざまな不思議なことが起こった。『物語』によれば、「そばを通りかかった商人たち、狩人たち、羊飼いたちが炎の柱を見たり、ろうそくが燃えているの

17 Милютенко. Святыя князья-мученики. С. 401.

を見たり、天使の歌声を聞いたりした」が、誰も遺骸を探そうとはしなかった。『説教』では、該当する部分の言及はない。

- ③ 『物語』では、ヤロスラフとスヴァトポルクの戦いについての叙述がある。『説教』には該当する戦いの部分がない。『物語』のこの部分は、『過ぎし年月に物語』の1019年の項と対応している。
- ④ ヤロスラフが勝利をおさめたが、グレープの遺骸の探索は困難をきわめる。『説教』によれば、狩人に導かれたスモレンスクの市長らは、「聖なる遺骸が稲妻のように輝いているのを見て、畏怖の念に捕われた。』『物語』では、「荒野で光とろうそくの燃える火（物語）」が目撃されたという風聞に接したヤロスラフが、遺骸がグレープのものであることに気づいた。
- ⑤ ヤロスラフがグレープの遺骸をヴィシゴロドに葬るように命じ、ヴィシゴロドの聖ワシーリイ聖堂に安置した。問題の«недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречьстьнѣ»という箇所は『物語』にのみ、グレープの遺骸がヴィシゴロドの聖ワシーリイ聖堂に埋葬された直後にあらわれる。
- ⑥ 一連の出来事のあと、『物語』は、グレープの聖骸が腐らなかったという奇跡が起こったことを賛美する頌詩風の部分がかなり長くつづく。ここでは、語り手がキリスト教を深く信奉する者（おそらくは修道士）であることがあらわになっている（第9章で詳述）。

これから問題にするのは、グレープの遺骸がどのようにあつかわれたのかについて述べる【A】⑬と【F】⑤、⑥を含む一連のテキストである。

3. グレープの遺骸は捨てられたのか：【A】⑬の中世ロシア語の記述

上記の三つの作品を検討して明らかなおりと、グレープの遺骸は、殺害の直後、殺害者たちによって、川岸（『年代記』）、あるいは、荒野（『物語』）の二本の丸太のあいだ、もしくは、荒野の丸太のした（『説教』）に捨てられ、4年の歳月を経たのち、ヤロスラフによってヴィシゴロド聖ワシーリイ聖堂のボリスのかたわらに葬られた。問題の謎めいた一節«недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречьстьнѣ»は、ヴィシゴロドへのグレープ埋葬直後の人々の反応について述べている。

しかしながら、ここで立ち止まって考えなければならない問題がある。ほんとうに殺害直後にグレープの遺骸は投げ捨てられたのか。敵であるとはいえ、高貴な身分であるグレープの遺骸を遺棄したのであればそれは不自然だと考えるのは当然であり、この不自然さにはしるべき説明が見いだされなくてはならない。殺害後のグレープの遺骸がどう扱われたのかについて、『年代記』、『物語』、『説教』がいかに叙述し、その叙述が後代の研究者にどのように解釈されたのかを見たい。

『年代記』

① 中世ロシア語テキスト⁽¹⁸⁾

Глѣбу же оубьену бывшу и повержену на брезѣ межѣ двѣма колодама. Посемь же вземше, везоша и и положиша и оу брата своего Бориса оу цркве святого Василья.

この部分にたいしては、D.C. リハチョーフによる現代ロシア語訳、O.V. トウヴォローゴフによる現代ロシア語訳、F. シアッカによる英訳、名古屋大学出版会版の邦訳があるのでかかげておく。

② D.C. リハチョーフによる現代ロシア語訳⁽¹⁹⁾

Итак, Глеб был убит, и был он брошен на берегу между двумя колодами, затем же, взяв его, увезли и положили его рядом с братом его Борисом в церкви святого Василия.

③ O.V. トウヴォローゴフによる現代ロシア語訳⁽²⁰⁾

Итак, Глеб был убит и положен на берегу между двумя колодами. Затем же, взяв его, увезли и положили рядом с братом его Борисом в церкви святого Василия.

④ F.A. シアッカによる英訳⁽²¹⁾

Now after Gleb had been murdered, [his body] was left behind on the shore between two logs [i.e. in a hollowed log-coffin]. But afterwards they took him, carried him [away] and buried him near his brother Boris by the Church of Saint Basil.

⑤ 名古屋大学出版会日本語訳⁽²²⁾

グレープは殺されて川岸の二本の丸太の間に捨てられた。その後で（人々は）彼を取り上げて運び、それを聖ヴァシリイの教会の兄ボリスのそばに安置した。

『物語』

① 中世ロシア語テキスト⁽²³⁾

Убиену же Глѣбови и повржену на пустѣ мѣстѣ межю двѣма колодама. И Гоподь не оставляяи своихъ рабѣ, яко же рече Давидь: «Хранить Господь вся кости ихъ, и ни едина отъ нихъ съкрушиться». И сему убо святууму лежащо дълго время, не остави въ невѣдѣнии и небрежении отинудъ пребыти, нь показа.

18 ПСРЛ. Т. 1. Стлб. 137.

19 ПЛДР. XI–начало XII века. С. 153.

20 БЛДР. Т. 1. С. 181.

21 Sciasca, “The History,” p. 110.

22 国本ほか編訳『ロシア原初年代記』156頁。

23 ПЛДР. XI–начало XII века. С. 294; БЛДР. Т. 1. С. 344; Милютенко. Святые князья-мученики. С. 304.

これにたいしては、Л.А. ドミートリエフの現代ロシア語訳、F.A. シアッカによる英訳と福岡星児による邦訳がある。

② Л.А. ドミートリエフの現代ロシア語訳⁽²⁴⁾

Когда убили Глеба, то бросили его в пустынном месте меж двух колод. Но Господь, не оставляющий своих рабов,—как сказал Давид,—«хранит все кости их, и ни одно из них не сокрушится». И этого святого, лежавшего долгое время, не оставил Бог в неведении и пренебрежении, но сохранил невредным и явлениями ознаменовал:

Комментарий⁽²⁵⁾: Здесь либо имеется в виду колода—ствол упавшего дерева, либо колода—гроб, выдолбленный из двух половин цельного ствола дерева.

注(筆者翻訳):ここでは、コロダ колодаという言葉は倒れた木の幹であると考えられている。あるいは、コロダは木の幹をふたつに割ったものでつくる柩である。

③ F.A. シアッカの英訳⁽²⁶⁾

Now after Gleb had been murdered, [his body] was left behind in a desolate place between two logs [i.e. in hollowed log-coffin]. But the Lord does not forsake His servants, for as David said, “The Lord will preserve all their bones and not one of them will be destroyed.” And in this wise the saint lay for a long time, not forsaken, unknown or neglected, but preserved, unharmed in every way—indeed signs bore witness [to the presence of the grave].

④ 福岡星児の日本語訳⁽²⁷⁾

こうしてグレーブは殺され、2つのコロダの間に入れて荒地に遺棄された。だが主はその僕達を見捨て給わない。『主は彼らのすべての骨をまもり給う、その一つだに折られることはなし』とダヴィデが言ったように。この聖者は長く横たわっていたが、主は彼をいつまでも知られることなく、問われることもなくそのままにしてはおかれず、現わし給うた。

脚注: コロダ(колода, клад) は松の木等を丸木舟状に削った棺で、2本というのは一方に死体を入れ、同じように削ったもう一方で蓋をしたのである。

『説教』

① 中世ロシア語テキスト⁽²⁸⁾

Оканьный же тии изнесоша тѣло святого, повергоша в пустыни подь кладю.

24 Л.А. ドミートリエフは下線部の一節を3度同じように訳している。年代順にあげると以下のとおりである。ПЛДР. XI—начало XII в. 1978. С. 295; Сказание о Борисе и Глебе. М., 1985. Т. 2. Научно-справочный аппарат издания. С. 50; БЛДР. Т. 1. С. 345; Милютенко. Святые князья-мученики. С. 305.

25 ПЛДР. XI—начало XII в. 1978. С. 455; БЛДР. Т. 1. С. 530. 注の文言はまったく同じである。

26 Sciacca, “The History,” p. 22.

27 福岡「ボリース」120頁。

28 Милютенко. Святые князья-мученики. С. 376.

これにたいしては、Н.И. ミリュチェンコによる現代ロシア語訳、F.A. シアッカによる英訳がある。日本語訳はないので、拙訳を付する。

② Н.И. ミリュチェンコによる現代ロシア語訳⁽²⁹⁾

Окаянные же вынесли тело святого и бросили в пустынном месте под колодой.

③ F.A. シアッカによる英訳⁽³⁰⁾

Then those accursed men carried away the body of the saint and abandoned it in a desolate place under a hollowed-out log.

④ 筆者による日本語訳

呪われた者たちは聖者の遺骸を運び出して、荒野の丸太のしたに放りだした。

引用は以上のとおりであるが、そこで問題となる点が2つある。第1に、グレープの遺骸がほんとうに捨てられたのかという問題である。第2に「コロダ колода, кладя」とは何かということである。

まず第1の点を考えよう。『年代記』、『物語』、『説教』のいずれの作品ともに、それぞれ「повержену」、「повържену」、「повергоша」という動詞「повръщи」の変化形が用いられており、おのおのの訳者によって『年代記』につき「брошен」（リハチョーフ）、「left behind」（シアッカ）、「捨てられた」（名古屋）、『物語』につき「бросили его」（ドミートリエフ）、「left behind」（シアッカ）、「遺棄された」（福岡）、『説教』につき「бросили」（ミリュチェンコ）、「abandon」（シアッカ）と訳されている。

И.И. スズネフスキイの『中世ロシア語辞典のための資料』⁽³¹⁾の「повръщи」の項を見よう。そこには、第1の意味として、бросить, кинутьの意味が挙げられ、第3の意味として、покинуть, оставитьの訳語があたえられて、この『物語』の当該箇所が例文としてひかれている。やはり「捨てられた」と解釈するほかない。

4. E. ゴルピンスキイの困惑

しかしながら、公という高貴な身分の者の遺骸が川岸や荒野に捨てられるなどということがほんとうにあるのだろうか。近代的な文献学が確立する19世紀半ばごろから、この問題はロシアの研究者たちを悩ませてきた。この苦悩を代表する人物は、『ロシア教会史』の著者E. ゴルピンスキイである。E. ゴルピンスキイは1903年に上梓した著書『ロシア教会の諸聖人の列聖の歴史』のなかで、ボリスとグレープの列聖について述べるさい、『年代記』の記述

29 Милютенко. Святые князья-мученики. С. 377.

30 Sciasca, "The History," p. 79.

31 «повръщи» // Срезневский. Материалы.

に依拠して「グレープの遺骸について」というほとんど1ページにわたる膨大な脚注をつけている⁽³²⁾。

E. ゴルビンスキイは、まずグレープの遺骸が捨てられた場所に着眼して次のように述べている。

グレープの遺骸について、それが『「荒野の岸辺のふたつのコロダのあいだに葬られた」といわれている。が『荒野の岸辺』というのは、すなわち、この殺害事件が起こった場所の近くにあった町であるスモレンスクではなく、とりもなおさずその殺害がおこなわれたドニエブル河畔の荒野のことを指している。

E. ゴルビンスキイは遺骸が遺棄された場所が、「荒野の岸辺」であることを確認している。しかしながら、スモレンスクの町からは比較的近くであったと考えている。『年代記』の記事«И поиде от Смоленска, яко зрѣмо и ста на Смядинѣ в насадѣ»を引き、次のように述べている。

「見えるうちに яко зрѣмо」という年代記の語からは、この場所がスモレンスクからこの場所が見えたことが暗示されている。「зрѣмо」という語は古い時代には、私たちにはもうわからなくなっている一定の距離をしめしていた（*Срезневский И.И.* «Материалы для словаря древнерусского языка» «зърети»）。

E. ゴルビンスキイは、グレープの遺骸が捨てられたという解釈にたいしてほとんど生理的な嫌悪感も示している。このために彼はグレープの遺骸は捨てられたのではなく、一定のやり方で葬られたと考えるのである。

「二本のコロダのあいだに」の部分については、大部分とまでは言わなくても、多くの人々が、遺骸は地中には葬られず、地面のうえの「二本のコロダ（丸太）」のあいだに放置され、投げ出されていたと理解している。しかし、事態をこのように理解することは極限的にあり得なさそうである。というよりも、ただたんに不可能であるように思われる。もしも公の殺害者たちが遺骸を葬らなかったとしても、彼とともにいた随員たちがそうはさせなかっただろう。また、スモレンスクの住人たちがどうして、自らの近くの野に埋葬されない死体、それも公の遺骸を放置したままでいたのだろうか。おそらく、もっともありうべきは、「二本のコロダのあいだ」という語を次のように理解することであろう。遺骸がしかるべき尊厳に敬意を払われて（教会のどこかの場所で）公らしく石の柩のなかに葬られたのではなく、死者の尊厳もなく（野原で）一般民と同じように二本の丸太でできた木の柩に葬られたのであろう。そのような木の柩は古い時代にはあったし、現在にいたるまで分離派教徒たちのあいだで用いられている。この部の末尾には聖者の一覧があり、そこにボロヴィチのヤコフの遺骸の顕現にかんする話がある。

32 *Голубинский Е.* История канонизации святых в русской церкви. М., 1903. С. 44.

以上のような結論がとりあえず得られたものの、E. ゴルビンスキイの疑念、逡巡はおさまることがない。彼は注記を次のようにつづけている。

もしも、遺骸が獣に食われていなかったと語られているならば、遺骸は人間の生活圏ではなく、野原に葬られたのであり、古い時代に遺骸がそう葬られたように、地面に浅く埋められたと了解される。遺骸はかんたんに獣たちに見つけられたはずであり、上の丸太を下の丸太から少しずらただけで獣たちは遺骸を食うことができただろう。もしも遺骸が「投げ捨てられた」と語られているならば、この表現は殺害者によって遺骸の尊厳もなく放り出されたという意味で理解しなくてはならない。このように、すなわち、グレープの遺骸が野原に埋葬もされずに投げ出されたかのごとく、事態を理解することの不整合性は、15世紀の文筆家たちも認識しており、そのなかの一人は彼によって書かれた聖事経の曆聖者伝のなかでこう言っている。「人々はグレープをスモレンスクの町から2ポプリシエ離れた荒野に葬った погребоша (Описание рукописей гр. Уварова, составленное архим. Леонидом. 掌院レオニードによって編まれたウヴァロフ伯所蔵の写本目録 ч. II, стр. 13, № 633)。」

このように、「グレープの遺骸が捨てられた」という一節にかんして、一定の解決をあたえてみたものの、E. ゴルビンスキイは最終的な解決を得たという確信をもてなかったように見える。

5. «КОЛОДА» とは何か

さらにこのこととも関連して、第2の論点が浮上する。「コロダ колода, клада」とは何かという問題である。ここで、E. ゴルビンスキイは«колода», «клада»が「二本の丸太でできた木の柩」であるという解釈を提示している。これは、『年代記』④の英訳、『物語』②の現代ロシア語訳中、『物語』③の英訳、『物語』④の日本語訳注と共通している。E. ゴルビンスキイのほかに、Л.А. ドミートリエフ、F.A. シアッカ、福岡星児が«колода»を「二本の丸太をくりぬいてできた木の柩」と解釈し、定説となっているように見える。

«колода»を「二本の丸太をくりぬいてできた木の柩」とする解釈は、1855年に刊行されたИ.И. スレズネフスキイの『中世ロシア語辞典のための資料』の記述にさかのぼる。「колода」の項を引くと、『年代記』の当該箇所が例文として引かれ、「клада»を見よと書かれている。「клада」の項を引くと、次の記述がでてくる。

Срезневский И.И. «Материалы для словаря древнерусского языка»

Колода: (см. клада)

Клада: 1. бревно, trunpus. 2. колода—выдолбленный пень дерева, употребляющийся для хоронения мертвых. ...(Колоды употреблялись вм. гробов даже и при Петре I: он запретил это особым указом для сбережения леса.)

«клада»の意味として、第一に「丸太」という意味が示され、第二に「コロダ」、すなわち、「死者を葬るために用いられた、真ん中をくりぬいた木の切り株」という意味があたえられている。さらに、「コロダは柩のかわりにピョートル1世時代にいたるまで用いられていた。ピョートル1世は、森林の保全のために特別の法令によってこれを禁止した」という丁寧な注がついている。

ほかの中世ロシア語辞典をあたってみよう。『11-17世紀ロシア語辞典』⁽³³⁾では、次のようになっており、やはり「一本の木の幹をくりぬいた柩」の意味があり、例文が載っている。グレープの遺骸のあつかわれ方にかんしては、沈黙を守っている。

Колода: 1. Толстый, лежащий ствол дерева, тяжелый обрубок дерева. 6. Гроб, выдолбленный из ствола одного дерева. (1441): Положиша его въ колоду, и осмоливше съ польстми, повезоша его на Москву на носилѣхъ. Воскр. Лет. VIII, 111. Положиша его въ колоду. Кн. Степ., 490. XVI-XVII вв 1560 гг.

『中世ロシア語辞典 (11-14世紀)』⁽³⁴⁾では、以下のごとく、「埋葬のために用いられた、なかをくりぬいた一本の丸太、柩」の意味があり、例文として挙げられているのは、グレープの遺骸のあつかわれ方をめぐるものと思われる、12世紀と14世紀に書かれた文章である。

Колода: 1. Бревно. 2. Бревно с выдолбленной серединой, употреблявшееся для захоронения, гроб: а) межѣ двѣма колодама съкровень. Стих 1156-1163, 100об. Ск. лл からの引用。б) Скончася блаженный Глѣбъ ... и положиша и в дубравѣ межю двѣма колодама. [так!] Пр 1383, 123 г.

例文は、グレープの遺骸は a) 「二つのコロダのあいだに隠された」、ないしは、b) 「カシ林の二つのコロダのあいだに (人々は) 置いた」としている。「врѣщи»の変化形を用いた形が用心深く回避されている。これは、E. ゴルピンスキイが探しあてた15世紀の聖事経の曆聖者伝の一節「人々はグレープを ... 荒野に葬った погребоша」と共通点をもっている。また、この点を顧慮して、БЛДР. Т. 1で『過ぎし年月の物語』を現代ロシア語訳に翻訳したO.B. トウヴォローゴフが、グレープの遺骸は「安置された положен」としているのであろう。

『ダーリの民衆語辞典』⁽³⁵⁾では、「колода»の訳語として、はじめに「лежащее толстое дерево, бревно 倒れた太い木、丸太」の意味をあげ、ほかに複数挙げた語釈のなかに次の記述が見いだされる。

Колода: долбленный гроб, домовинка из цельного отруба, любимая, по старым обычаям, раскольниками.

33 «колода» // Словарь русского языка XI-XVII вв.

34 «колода» // Словарь древнерусского языка (XI-XIV вв.).

35 «колода» // Даль В. Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля.

削りぬいてつくった柩。一本の木を丸ごと使った棺桶で、古い慣習に則ったものとして分離派教徒に好んで用いられた。

このように見てくると、И.И. スレズネフスキイが «колода» に「丸太でできた柩」という意味をあてがって以来、現代にいたるまで『11-17世紀ロシア語辞典』、『中世ロシア語辞典(11-14世紀)』でも踏襲され、ほぼ定説となってきたことがわかる。地方をまわってじかに民衆語彙を採集したВ.И. ダーリもこの見解を支持しているように見える。こうした文献学的な研究史を踏まえ、Л.А. ドミートリエフ、F.A. シアツカ、福岡星児が «колода» を「二本の丸太をくりぬいてできた木の柩」と注釈をほどこしたのである。

しかしながら、このことは、研究者たちから信頼された、『年代記』、『物語』、『説教』のもっとも古いテキストにおいて、一致してシンプルかつ明瞭に、グレープの遺骸が「捨てられた повержену, повържену, повергоша」と書かれたことと根本的に矛盾しているのではないだろうか。「колода」を「丸太でできた柩」とする解釈について、さらに掘り下げて見てみることにしよう。手がかりは、И.И. スレズネフスキイとВ.И. ダーリの記述にある。

先述のとおり、И.И. スレズネフスキイはグレープの遺骸のあつかわれ方についてどう考えるか悩んだらしく、「колода», «клада» を「丸太でできた柩」としながら、「КОЛОДАは柩のかわりにピョートル1世時代にいたるまで用いられていた。ピョートル1世は、森林の保全のために特別の法令によってこれを禁止した」と例外的な注記をつけている。

ピョートル1世がロシアの西欧化改革に取り組み、海への出口を求めて、バルト海を内海としていた当時の圧倒的な強国スウェーデンと大北方戦争を戦ったことはよく知られている。長期にわたるこの戦争のため、1701年の段階で軍事費の国家予算に占める割合は75パーセントに昇っていた⁽³⁶⁾。こうした財政難のなかで戦費を調達するために、ロシア政府は臨時税と専売制の導入に踏み切った。このとき専売の対象となった品目のなかに、じつに柩が含まれていたのである。В.О. クリュチェフスキイは次のように述べている。

以前からの専売品であった樹脂、炭酸カリ、大黃、膠のほか、新たな品目が加えられた。それは、塩、たばこ、白亜、タール、魚油、そして、何と檜の柩であった。1705年に、この古いロシアの富裕な人間のぜいたく品は、商売人の手から国庫へと取り上げられ、国は4倍の高値でこれを売りつけたのであった。その後、取り上げられた分を売り切ってしまうと、そうした柩は完全に禁止された⁽³⁷⁾。

ピョートル1世の治世において、檜の柩が販売はおろかつくることさえも禁止されたのは、造船事業のためであったと、С.М. ソロヴィヨフは別の視点から説明している⁽³⁸⁾。И.И. スレズネフスキイが引き合いに出しているのは、この事実である。В.О. クリュチェフスキイ

36 田中陽兒、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史体系ロシア史2』山川出版社、1994年、15頁。

37 Ключевский В.О. Сочинения в 9 томах. Курс русской истории. Часть IV. С. 123; В.О. Ключевский 『ロシア史講話4』恒文社、1992年、167-168頁。

38 Соловьев С.М. История России с древнейших времен. Т. 15. С. 317-318.

ははっきりと、一本の樫の大木から切り出された柩は、ピョートル以前のロシアにおいて最高級品であったと記している。民衆語彙を採集したダーリも、大木を一本丸ごと使った柩が古儀式派教徒を中心として用いられてきたことを報告している。「丸太でできた柩」はかぎりなくぜいたく品に近く、死者にたいして大いなる敬意を払うものであって、死者の尊厳を奪われて「捨てられた」者が行き着く先としては、まったく似つかわしくない。

グレープの遺骸について、E. ゴルピンスキイは「遺骸は ... 死者の尊厳もなく（野原で）一般民と同じように二本の丸太でできた木の柩に葬られたのであろう。そのような木の柩は古い時代にはあったし、現在にいたるまで分離派教徒たちのあいだで用いられている」と述べているが、この記述は、「колода」をぜいたく品とする B.O. クリュチェフスキイ、C.M. ソロヴィヨフ、B. ダーリの述べることに矛盾し、不正確である。

つまり、И.И. スレズネフスキイの着想、「колода」を「丸太でできた柩」とする見解は誤りであり、さらに『11-17 世紀ロシア語辞典』、『中世ロシア語辞典（11-14 世紀）』もこの誤りを継承している。『中世ロシア語辞典（11-14 世紀）』の例文は、いずれも 12 世紀後半、14 世紀後半と事件から隔たった時代のものである。したがって、おそらくは И.И. スレズネフスキイの見解から、「колода」という語に「二本の丸太をくりぬいてできた木の柩」という注釈をほどこした Л.А. ドミートリエフ、E. ゴルピンスキイ、F.A. シアッカ、福岡星児も誤りを犯していたことになる。

6. 中世ロシアのイコノロジーに見るグレープの遺骸

И.И. スレズネフスキイや E. ゴルピンスキイらが誤っていたことを証しだてる、事件からもっと近い時代に属すると思われる証拠がある。中世ロシアの写本ミニチュールがそれである。次に、中世ロシアの写本において、グレープの遺骸がどのような扱いを受けたのかを見てみることにしよう。

まず『ラジヴィール年代記』л. 77об.⁽³⁹⁾を見てみよう。『ラジヴィール年代記』は 15 世紀後半に制作されたと考えられる写本で、全 245 葉表裏からなり、617 点の挿絵が明るい鮮やかな色彩で描きこまれている（サンクト・ペテルブルグ、ロシア科学アカデミー図書館（БАН）所蔵）（図 1）。

B.A. ルイバコフの記述にしたがって、『ラジヴィール年代記』の写本について述べる。A.A. シャーフマトフが挿絵のオリジナルは 13 世紀最初の写本に由来するという見解をあらわして以来、多くの学者がこの説を支持してきた。また、考古学者の A.B. アルツィホフスキイによれば、挿絵のディテールは 10 世紀から 12 世紀の考古学出土品と一致する。写本は 15 世紀終わりに制作されたものであるが、画像自体は 11 世紀から 12 世紀にかけての絵入りの年代記に由来すると考えられるので、私たちがこの考察に利用している『ウスペンスキイ文集』のテキストに時代的にもっとも近いといえる⁽⁴⁰⁾。

39 Радзивилловская летопись: Факсимильное воспроизведение рукописи. СПб., 1994. л. 77об.

40 Рыбаков Б.А. Миниатюры Радзивилловской летописи и русские лицевые рукописи X–XII веков // Радзивилловская летопись: Текст. Исследование. Описание миниатюр. СПб., 1994. С. 281.



図1 『ラジヴィール年代記』 頁. 77об.

この『ラジヴィール年代記』の77葉裏に二本の木のあいだに捨てられたグレープの遺骸が描かれている。

向かって右手の絵が、グレープの遺骸が二本の丸木のあいだに捨てられるシーンを描いた【A】⑬の図像である。両方の木からいくつかの枝が伸びており、「柩」などではないことがはっきりとわかる。枝がいく本か切られているのは、それが「丸太 бревно」だからである。画面上（シーン奥）には、二本のろうそくが描かれているが、それは【F】②のディテールと一致する。【F】は『物語』と『説教』の共通項であり、『年代記』（『過ぎし年月の物語』）にはあらわれないが、『ラジヴィール年代記』の挿絵にはきちんと描きこまれている。このディテールは『説教』にも別の場所であらわれている（【G】④）。

もう一つは、14世紀後半に制作された『シリヴェストル文集』（ロシア国立公文書館（РГАДА）モスクワ宗務院印刷所図書館写本室 Рукописный отдел библиотеки Московской Синодальной типографии フォンド 381、53番 ф. 381, № 53）のものである⁽⁴¹⁾。この写本は、さまざまなジャンルに属する全部で12の作品を収めた複合的な文集で、先に述べたように、ボリスとグレープ関係でも、『説教』、『物語』、『奇跡にかんする物語』の3篇が収められている。

この『シリヴェストル文集』の135葉表に、やはり二本の丸太のあいだに捨てられたグレープの遺骸が描かれている（図2）。問題になるのは右手の絵である。そこには、二本の、枝が切りそろえられた丸太のあいだにグレープの遺骸が横たわっているのが見える。そのうえに覆いかぶさるように、鉄の兜をかぶり、鎧をまとった完全武装の7人の刺客が船を逆さにしてもって立っている。刺客たちはこの舟に載せてグレープの遺骸を岸边に運び、船を逆さにしてそれを二本の丸太のあいだに投げ落とし、グレープの遺骸のうえに被せたのであろうか。

135葉表の挿絵のうえには、絵が何について描かれているかの但し書きがある。この但し

41 Сказание о Борисе и Глебе. Т. 2. С. 23.



図2 л. 135

書きには、テキスト本文にはない言葉が書かれている。それは以下のとおりである。「Святого Глѣба положиша в лѣсъ mezi двѣма кладама под насадомъ」。日本語訳を付すると、「(人々は) 聖グレープを森の二本の丸太のあいだの平底船のしたに置いた」となる。

原テキストは『物語』①とまったく同じであるが、そこにある「捨てられた повержену」という文言が、但し書きでは「置いた положиша」に変わっている。また、但し書きでは「森に в лѣсъ」「平底船のしたに под насадомъ」というディテールが加わっている。

「森に置いた положиша в лѣсъ」は『中世ロシア語辞典(14–16世紀)』の例文6)「櫟林に置いた положиша и в дубравѣ」に近いが、この但し書きにも、例文6)と同様に「グレープの遺骸が捨てられた」と解釈することへの逡巡が感じられる。「平底船のしたに под насадомъ」は、『説教』の「丸太のしたに подь кладю」という表現と似ているが、ほかのどのテキストにも現われない『シリヴェストル文集』固有のディテールである。また、『ラジヴィール年代記』では、グレープの遺骸は殺害されたときの着衣のままであるのにたいして、『シリヴェストル文集』では、遺骸が包帯のようなものでくるまれている。やはりグレープの遺骸は「捨てられた」のではなく、埋葬されたのであろうか。

そうではあるまい。全体として、『ラジヴィール年代記』挿絵 л. 77об. と『シリヴェストル文集』 л. 135. とのあいだには、驚くべき一致が見られる。二本の丸太が同じように描かれ、そのあいだにグレープの遺骸があるという画像の構図は、両者のあいだでまったく同じであるし、いずれもテキストでは「捨てられた повержену」という同一の単語が用いられている。

次のように考えることはできないであろうか。

かなり早い段階で、おそらく考古学的発掘物と挿絵に描かれた事物との一致が示す⁽⁴²⁾ ように、遅くとも12世紀初頭ころには、テキストはテキストで、画像は画像で、ボリスとグレープをめぐる一連の事件をどう描くかについての一定の「型」が出来あがっていた。「型」は「型」

42 Рыбаков. Миниатюры. С. 281.

として、写字生と絵師によって世代から世代へと、忠実かつ厳格に伝承されたが、その過程において、画像がもつ本来の意味は忘れ去られてしまった。そこで、伝承されるべき「型」と、グレープは聖者であるからその遺骸が捨てられるのはおかしいという宗教上の通念との折衷が図られ、画像とテキストとの相互関係はあらたに解釈しなおされることになったのではないか。その結果、*н. 135.*の挿絵余白の但し書きのように、「捨てられた」が「安置された」に変わったり、「平底船のしたに」という制作者側の空想によるあらたな解釈が加わったりした。『中世ロシア語辞典（11–14世紀）』の用例 a)、6) も、そうした「創作的」解釈の一例であろう。

「グレープの遺骸が捨てられた」と解釈することへの支持は、たとえば、*Н.И. Миллеченко*が、イギリスの聖エドムンドと聖グレープに共通のモチーフとして、「聖者伝のなかで、エドムンドの遺骸が葬られずに放り出され、そののち発見されたことが語られている」点を指摘していることに現われている⁽⁴³⁾。また、『スラヴ百科事典』では、グレープの遺骸について、「彼の遺骸は、岸辺の腐った木の幹のあいだに置かれていた⁽⁴⁴⁾」とされている。ただし、「腐った木の幹」というディテールが何に由来するのかは不明である。

もうひとつ、画像の「型」といえば、グレープがつねに髭なしで描かれるということについて考えなくてはならない。以下のイコン画（騎馬像、トレチャコフ美術館所蔵、14世紀）を見よう。向かって右側がグレープである（図3）。



図3

有名なロシア美術館所蔵の2人の立像でも同じように、向かって右側のグレープに髭が描かれていない（図4）。

そのほか *Н.И. Миллеченко*もその著作のなかでしばしばグレープの肖像を掲げている（11世紀トウムトラカンの石版レリーフ、14世紀モスクワ派イコン画、12世紀終わりから13世紀はじめにかけてのリャザンのメダリオン、13世紀初頭のコルト）が、いずれも髭がない⁽⁴⁵⁾。*Г.В. Маркер*も、イコンの描かれ方のパターンを集成した『中世ロシアの聖者』という書のなかで、ロシア・イコン画の伝統におけるボリスとグレープの描き方を13例紹介している⁽⁴⁶⁾が、いずれもボリスに髭があるが、グレープにはない。髭なしで描かれるグレー

43 *Миллеченко. Святые князья-мученики. С. 15.*

44 *Славянская энциклопедия. Киевская русь—Московия. Т. 1. М., 2002. С. 280.*

45 *Миллеченко. Святые князья-мученики. С. 29, 41, 53, 81.*

46 *Маркер Г.В. Святые древней Руси. Материалы по иконографии (прориси, переводы, иконописные подлинники). Т. 1. С. 152–177, 206–207.*



図 4

中世の画像からはっきりわかるとおり、「клада」は「丸太でできた柩」ではなく、たんなる「丸太」であった。幼いといってもよいほどの年端の行かぬグレーブは、幼児（あるいは、少年）に直接手を下すことを嫌悪した刺客たちの命令で、料理人トルチンによって首を掻き切られて殺され、そののち、遺骸はこの二本の丸太のあいだに「捨てられた」。では、テキストや画像において「型」として伝承されてきた、「グレーブの遺骸が捨てられた」ことの意味は何か。その答えは、ロシア民俗学の知見によってもたらされる。

7. 残置された死者 заложные покойники

20世紀初頭に活躍したロシアの民俗学者 Д.К. Зеле́нинは、ロシアにおける東スラヴ系住民、フィン・ウゴール系住民のあいだで、20世紀にいたるまで、土への埋葬を拒絶される死者のカテゴリーがあったことを報告している⁽⁴⁸⁾。

47 Горский А.Д. Законодательство периода образования Русского централизованного государства. Т. 2. М., 1985. С. 301–302; 中村喜和「百章」試訳 (2)『一橋大学研究年報人文科学研究』第31号、1994年、49–50頁。

48 以下、引用は *Зеленин Д.К. Восточнославянская этнография*. М., 1991. С. 352–353. そのほか、以下参照。 *Зеленин Д.К. К вопросу о русалках (Культ покойников, умерших неестественно смертию, у русских и у финнов)* // *Избранные труды: Статьи по духовной культуре 1901–1913*. М., 1994. С. 230–298; *Зеленин Д.К. Избранные труды. Очерки русской мифологии: умершие неестественной смертию и русалки*. М., 1995; Глава 10. Религия древних славян // *Токарев С.А. Религия в истории народов мира*. М., 1986. С. 201–215; Глава 7. Язычество и отношение к смерти // *Петрухин В.Я. Начало этнокультурной истории Руси IX–XI веков*. М., 1995. С. 195–215; «мертвых культ» // *Славянские древности: Этнолингвистический словарь*

19世紀になっても、20世紀になっても、墓をつくらずに葬られるのは、不浄であり、生きている者たちにとって危険だと見なされる死者たちである。基本的にこれは暴力的に死にいたらしめられた者、ことに自殺者であった。若くして、生まれたときにさだめられた時にいらずに死んだ者全員が、このように埋葬を拒絶された。北ロシアの住人たちは、これらの死者をザロジュヌイエ заложные、すなわち、残置された死者と呼んだ。この呼び名は、死者たちが埋められず、地上に放置されたのちその遺骸が木の枝で蔽われたことによる。

「若くして（幼くして）暴力的に死に追いやられ、土のなかに埋められず、放置された」という「残置された死者」の要件は、まさに荒野の二本の丸太のあいだに投げ捨てられたグレープのそれとほとんど完全に一致する。では、なぜこのような「残置」という埋葬の方法が生まれたのであろうか。「残置」という埋葬方法の背後には、非業の死を遂げた者の遺骸が穢れており、その穢れによって大地を冒瀆することへの禁忌という感受性があったと、Д.К.ゼレーニンは述べている。

東スラヴ人の非常に古い異教的な習慣は、「残置された死者」を地中に埋めないように要求していたのである。これはおそらく、不浄な死体によって大地が穢れることを回避するためであった。... 東スラヴ人たちのあいだで見出されるのは、不浄な死体が地中に埋葬されることによって、汚された大地が怒るという考え方である。この「大地の怒り」は、じつにさまざまな表現を見出す。なかんずく、怒った「母なる大地」は不浄な死体を受けつけない。そのような死者は、何度埋葬しようとならば地上に戻ってくる。そのときに埋葬された死体は腐敗せず、このために夜ごと墓から這いだしてさまよい歩くのである。...

「大地の怒り」の第3の兆候は、生きた人間にも感じるものである。大地は、蒔いたばかりの穀物の芽を枯らす春の寒さと寒の戻りによって、自らの怒りを表現した。

Д.К.ゼレーニンは19世紀末よりはるか以前、太古の昔から、このような習慣があったことを指摘して次のように言っている。

現在でも広まっているこの考え方は、ウラジーミル主教セラピオン（1274年没）の説教⁽⁴⁹⁾にも反映されている。私たちは同様に1506年にモスクワに来たマクシム・グレクの著作にも民衆がこうした考えをもっていたことを見出すことができる。このゆえに、太古の時代のスラヴ人た

под общей редакцией Н.И. Толстого. Т. 3. М., 2004; «покойник «заложный», «предки» // Славянские древности. Т.4. М., 2009.

49 「今、神の怒りを見て、あなたがたは考える。首吊りをして死んだ者や溺れ死んだ者を埋葬した者がいるが、自分自身が苦しまないように、もう一度掘り返そうと。なんというでたらめだ。おお、なんという不信心なのだ」。ПЛДР. XIII в. С. 452–455; БЛДР. Т. 5. С. 382–383; 三浦清美「中世ロシア文学図書館 (I) モンゴル・タタールのくびき」『電気通信大学紀要』第22巻第1号 [通巻38号]、2010年、151頁。この箇所について、B.B. コーレソフは次のような注をつけている。「セラピオンは自殺者にかんする俗信について述べている。自殺者は埋葬されてはならなかった。さもないと、凶作、疫病、飢饉が起こるからである。セラピオンは19世紀まで持続した（民俗学者たちによって一再ならず記録されている）迷信と戦っている」。ПЛДР. XIII в. С. 610; БЛДР. Т. 5. С. 520.

ちは「残置された死体」を墓のなかには葬らず、遺体を人里離れた場所、たとえば、谷間や沼地に放置したのである。枝や小さな丸太そのほかで遺骸を蔽ったのは、野生の動物から遺骸を守るためであったことは明らかである。

「野生の動物から遺骸を守るために枝や小さな丸太で遺骸を蔽った」という D.K. ゼレーニンの指摘は、グレープの遺骸が「二本の丸太のあいだ」、「丸太のした」に「捨てられた」、あるいは、「置かれた」、もしくは、「船をかぶせられた」という諸文献にあらわれるグレープの遺骸のあつかわれ方と一致する。『年代記』、『物語』、『説教』が一致して語る、グレープの遺骸が「捨てられた」ことの意味は、グレープが「残置された死者」だったということである。穢れているがゆえに教会のなかには葬ることが出来なかったのだ。

幼くして殺されたグレープがこの世に生き残った者たちに災厄をおよぼすのではないかという危惧が、民衆にとって現実のものであったことを明瞭に語る証拠がある。『奇跡についての物語』、『説教』における奇跡譚に紛れこんだ、いくつかの不気味なエピソードがそれぞれある。次章では、この「不気味な奇跡」について見てみることにしよう。

8. 奇跡譚における不気味な出来事

まず注目すべきは、別個に成立したと考えられる『奇跡についての物語』と『説教』後半部の奇跡譚が内容的に非常に似通っていることである。聖者として認定されるためには、その生前ないしは死後に奇跡が起こったことが報告さなければならぬ。ボリスとグレープにかんしても、列聖のさいに奇跡としておこった事件が教会から認定された結果、『奇跡についての物語』（『物語』のあとに直結する部分）と『説教』後半部の奇跡譚が編まれたと考えべきであろう。奇跡に似つかわしい話もある⁽⁵⁰⁾が、怪奇的な要素を含む奇跡譚が多いことにも気づかされる。筆者は以下にボリスとグレープにまつわる説話群における怪奇的な要素を検討したい。それは【G】であげる諸エピソードである。

【G】

- ① ボリスとグレープの遺骸があったところでは、夜に何度も、ろうそくの明かりが灯ったり、空から火の柱が降ったりした。この記述は、『説教』のみにある。
- ② ヴァイキングたちがボリスとグレープの柩の前にやってくると、柩から炎が噴出し、そのうちの1人がひどい火傷を負った。以後、人々は恐れてひつぎのそばには近づかなくなった（『奇跡にかんする物語』、『説教』）。
- ③ ボリスとグレープの遺骸が安置された、ヴィシゴロドの聖ワシーリイ聖堂から火が出て、聖堂が丸焼けになった。聖具は運び出されて無事だった（『奇跡にかんする物語』、『説教』）。『説教』では、この火事の原因が、堂務者のろうそくの消し忘れにあり、ボリスとグレープの遺骸が聖ワシーリイ教会ではなく、聖ボリスと聖グレープ教会に安置されるきっかけとなる神の思し召しであったことを強調している。

50 具体的には、足萎えが立つ、盲人が目が見えるようになる、びっこが歩く、無実の囚人が解放される、遺骸から芳香が発する、以上の5つである。

- ④ 1072年のボリスとグレープの遺骸の移葬のさい、スヴァトスラフ・ヤロスラヴィチ公は聖グレープの遺骸の腕をもちあげ、自らの首の腫れ物に触れさせた。スヴァトスラフ公はこのあと頭に異物の存在を感じたので、よく見させてみると、グレープの爪がスヴァトスラフ公の頭に刺さっていた（『奇跡についての物語』）。『奇跡についての物語』でも、『説教』でもあからさまに語られていないが、諸年代記を調べると、スヴァトスラフ公は腫れ物の切開手術が失敗して、**1076年12月27日に落命したことがわかる**⁽⁵¹⁾。
- ⑤ 聖ニコラの日に労働した女への罰。聖ニコラの祝日にみなは教会に行ったが、女は誘われたにもかかわらず、教会へは行かず残って仕事をしていた。すると、ボリスとグレープが現われ、女が仕事をしているのを咎め、家をめっちゃめっちゃに壊して、女を半殺しの目に合わせた（『奇跡についての物語』第5の奇跡、『説教』）。
- ⑥ スヴァトスラフ公はボリスとグレープのための教会を建立することを思い立った。ところが、教会が80キュービットの高さに達したとき、スヴァトスラフ公は逝去した。建築事業は弟のフセヴォロドが継承し、教会は完成するが、建設が終わったその夜に教会の屋根が崩れ、そのために教会全体が崩落した（『奇跡にかんする物語』）。

【G】は叙述の分量としては少ないが、そのあたえる印象は強烈である。ことに、【G】④グレープの爪がスヴァトスラフ公の頭に突き刺さり、その公が腫れ物の切開手術で死んでいること、しかもその死について、『奇跡についての物語』も『説教』も沈黙しているというのは怖い話である。【G】⑥では、そのスヴァトスラフがボリスとグレープのための教会を建立しようとするが、そのことを発心したことが何か悪いことであったかのように亡くなり、その教会も完成したと思ったとたん崩落するというエピソードが述べられている。やはり恐ろしいとしか言いようがない。

また、ボリスとグレープの遺骸が安置された聖ワシーリイ教会の焼失について、それがグレープの祟りであったという憶測をあえて打ち消すかのように、ネストルはその原因を具体的かつ詳細に語り、それがグレープの祟りのためであることを入念に否定したうえ、ボリスとグレープのための特別な教会が建立される契機となった「神の思し召し」だと強弁している。

【G】①は【F】②とほぼ同じ内容であり、G. レーンホフが指摘するように⁽⁵²⁾、死者の魂がああ世にゆくことができずさ迷い歩いていることを想起させる。【G】②の「ボリスとグレープの柩から放たれる炎」、【G】⑤の「聖ニコラの日に労働した女への罰」のエピソードも、神に嘉された聖者の仕事とは思えない。

このように、『奇跡についての物語』、『説教』後半部を題材に、ボリスとグレープをめぐる奇跡譚を詳細に見てみると、それらが神に嘉された聖者の奇跡と割り切るにはあまりにも

51 たとえば、『ラヴレンチイ年代記』の1076年の項には、次のように書かれている。「Святослав, сынъ Ярославль мѣсяца декабря КЗ от рѣзанья желве». ПСРЛ. Т. 1. Стлб. 199. 筆者による日本語訳は次のとおりである。「スヴァトスラフ、ヤロスラフの息子は、この年の12月27日、頭蓋の切開（手術）のために死んだ」。

52 G. Lenhoff, *The Martyred Princes Boris and Gleb: A Social-Cultural Study of the Cult and the Texts* (Columbus: Slavica Publishers, 1989), p. 40.

矛盾する要素をおびただしく抱えていることがわかる。以上の検討から、私たちはボリスとグレープ、ことに幼くして殺され、その遺骸が荒野に捨てられたグレープが、崇りをもたらす存在として恐れられていたという結論を導くことができるように思われる。

つぎにここまでで得られた結果にもとづいて、懸案の語句 «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» について考察を進めることにしよう。

9. «НЕДОУМѢЮЩЕ, ЯКО ЖЕ БѢ ЛЕПО ПРЕЧѢСТЬНѢ» の解釈について：

【F】⑤、⑥の中世ロシア語の記述

これまでのボリスとグレープをめぐる諸作品の研究史において、『物語』のこの文言 «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» がもつ意味は深く究明されてこなかった。以上の考察を踏まえて、この一節を解釈する時が来たようだ。しかし、そのまえに、グレープの遺骸が「捨てられた」という部分からこの一節までの、およそ 500 語超ある箇所についてその概略を述べたい。それは【F】①～④に相当する部分である。

遺骸はそのまま荒野に長いあいだ放置されていたが、腐敗を免れて無傷のままであった。遺骸のまわりで、さまざまな不思議なことが起こった。そばを通りかかった商人たち、狩人たち、羊飼いたちが炎の柱を見たり、ろうそくが燃えているのを見たり、天使の歌声を聞いたりしたが、誰も遺骸を探そうとはしなかった。一方、ヤロスラフはスヴァトポルクと戦い、4年間の激戦を制してスヴァトポルクを死に追いやった。勝利ののち先に述べた不思議な出来事を知ったヤロスラフは、グレープの遺骸の探索に乗り出す。そこで、【F】⑤が来る。ふたたび【F】⑤、⑥の中世ロシア語のテキスト⁽⁵³⁾を見てみよう。

【F】⑤

И обретоша и иде же бѣша видѣли, и шьдѣше съ крысты и съ свѣщами мнозѣми и съ кандилы, и съ чѣстнью многою, и въложѣше въ корабль, и пришедѣше положиша и Вышегородѣ, иде же лежить и тѣло прѣблагенааго Бориса и раскопавѣше землю, и тако же положиша и недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ.

本論考はここまでの考察で、グレープが一種の崇り神であったという仮説を提起してきた。グレープは「残置された死者」だった。幼くして暴力によって死に追いやられたゆえに、理不尽にも同時代の人々によって穢れたものと捉えられ、埋葬を拒否されていた。このことを念頭に入れて、「умѣюще」「できる」という状態が «до» 「十分で」 «не» 「ない」という含意をもつ、「недоумѣюще」の解釈を考えよう。

ここで筆者は、該当箇所が奇跡についての言及ではないことを前提に、「недоумѣюще」は字義どおり「理解しない」「わからない」とする読みを提起したい。つまり、グレープの遺骸がうるわしく神々しいかがどうか「わからず「недоумѣюще」」、大地の怒りを招くこと

53 ПЛДР. XI—начало XII века. С. 298; БЛДР. Т. 1. С. 346; Милотенко. Святые князья-мученики. С. 308.

を恐れて土のなかに埋めることを嫌がる人々がいたと考えるのである。ヴィシゴロドの人々は、グレープの遺骸がうるわしく神々しいことを疑ったのだ。以上を踏まえて、筆者の試訳を提示したい。

三浦訳

そして、彼らは幻が現れた場所でグレープの遺骸を発見し、十字架とたくさんのろうそくと香炉をもってその場に至り、大いなる敬虔の念をもってグレープの遺骸を舟に載せ、ヴィシゴロドに着くと、聖なるボリスの遺骸が安置されている場所にグレープを埋葬した。彼らは地面を掘り、そこにグレープを埋葬したが、それが美しく清浄であることがわからなかった。

ここまでで当該の語句について一定の解決を得てきた。最後に、この語句とその後続箇所との連関を検討しなくてはならない。後続箇所の解釈によっては反論もありうるからである。該当箇所のあと、『物語』ではつぎのようなテキストがつづいている。

【F】⑥

Се же пречюдно бысть и дивно и память достойно; како и колико лѣтъ лежавъ тѣло святаго, то же не врежно пребысть, ни отъ коегоже плътюядца, ни бѣаше почрънѣло, яко же обычай имуть телеса мъртвыхъ, нъ свѣтло и красьно и цѣло и благу воню имущю. Тако Богу съхранившю своего страстотърпца тѣло.

この後続箇所で問題となるのは、「Се же пречюдно бысть и дивно и память достойно」という語句である。とりあえずは、「これはいとも不思議かつ驚くべきことであり、記憶に止めるべきことである」と訳せそうであり、そう訳せば、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречьстьнѣ»を「うるわしく神々しいことに驚いた」と見なして、遺骸に奇跡が起きたとする解釈とのあいだに整合性を見出すこともできる。事実、研究者たちは後続箇所をこのように読んで納得してきた。しかし、そうした理解は当を得たものであろうか。

この問題に解決をあたえるためにはやはり、『物語』全体の叙述の構造を検討する必要がある。多くの場合、研究者たちは『物語』全体の構造を視野におさめたうえでではなく、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречьстьнѣ」とその後続箇所だけを近視眼的に見て解釈を考えているように思われるからである。以下、この箇所が『物語』の全体のなかでどのような位置を占めるかを検討しよう。

『物語』の冒頭で、ウラジーミルには12の子があり、彼らが一つ腹ではなく彼らの母はさまざまであった事実が提示され、その子たちと母たちの素性が、これからはじまる物語の背景として逸話的に述べられている。「事の発端を順を追って物語ることにしよう」、「ここでは、この物語の主人公について物語ることにしよう」、「饒舌のなかで肝心なことを忘れないように、多くのことを語ることをやめよう」などのメタ的表現も目立つ。全体的に「状態記述的」と名づけることができよう。

しかしながら、この部分が終わると、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречьстьнѣ」まで、『物語』は一貫して出来事をその生起する順に記述する。時間的前後関係に最大の関心を払っ

て出来事がつぎつぎと物語られる。叙述は、「物語進行的」と名づけることができる。叙述者の視点はつねに叙述された出来事と同時的に存在しており、叙述者にはすぐ先に起こる出来事がわからないまま、出来事が起こるたびにそれを記述するかのようである。

これにたいし、この後続箇所は、一連の出来事を完全に過ぎ去ったものと捉えて、それを回顧し、評価を加えている。この説話の様態は、ウラジーミルの子と母たちの話と同様、「状態記述的」である。そこでは、グレープの遺骸の状態が描写され、このあと、物語の時間にかかわりのない普遍的な価値判断として、「神はこのように自らの殉教者の遺骸を保った」という評価がくだされている。叙述者の視点は、すべての出来事が終わったのを見届けたところから、過去のさまざまな出来事を展望できる特権的位置にある。以後も『物語』の最後まで、叙述が時間を軸とする語りにもどることはなく、時間を超越したキリスト教聖者の聖性にかんする思想が述べられ、頌詞が謳われる⁽⁵⁴⁾。

すなわち、物語の時間を軸とする語りをとる «недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» までの記述と、回顧的に諸事実を把握し、価値判断をくだすそれ以降の記述とでは、叙述の質がほとんど劇的といえるほどに違うのである。つまり、前者と後者のあいだに『物語』の説話構造の大きな区切りが存在するのだ。だから、この箇所での叙述の質の変化に注意を払わず、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» までと、それ以後を単純にひとつながりのものと読むことは誤りである。

その認識のうえで、「се» という語の意味について考える必要がある。そもそも『物語』のこのテキストは 12 世紀おわりから 13 世紀はじめにかけて成立した『ウスペンスキイ文集』に収められたものであるが、言葉の比較的古い特徴を保っている。たとえば、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ» の直前の箇所でも、グレープの遺骸が発見されたことを «И обретоша и» と、ヴィシゴロドに葬られたことを «и пришедше положиша и Вышегородѣ» と記述しているが、いずれの場合も、対格である 2 番目の «и» は、活動体でありながら生格と一致しないかたちをとっている。これは古代教会スラヴ語と共通する表現形式である⁽⁵⁵⁾。

この点から、はたして «се» を単純に「これは」と訳してよいかどうか問題となる。古代教会スラヴ語では、「се» は「これは」として用いられるよりも、「見よ」という意味で用いられるほうが多いからだ。しかも、この «се» には、各種の古代教会スラヴ語の辞典で

54 筆者はかつて、中世ロシアにおける物語作品における語りを、大きく①時間の軸による叙述、②回顧的視座による叙述の二つに分類し、②の下位分類として、(a)因果関係による叙述、(b) [巨視的把握 + 微視的把握]、(c) 物語の享受者と語られた事柄を密接に結び付けるためのメタ的叙述の3つを設定して考察したことがある。具体的分析対象として『キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝』を選んだ。三浦清美「キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝における物語の比較研究 (II) : ポリカルプによる二つの物語 (Сл. 28 Григорий, Сл. 30 Моисей) をめぐる考察」『Slavistika』IX、1992年、194-259頁；三浦清美「キエフ・ペチェルスキー修道院聖者列伝における物語の比較研究 (III) : 物語作者ポリカルプ」『スラヴ研究』第40号、1993年、97-123頁。本論における叙述分析もその手法に則っている。分析手法の詳細は、後者の104-105頁参照。

55 木村彰一『古代教会スラヴ語入門』白水社、1985年、76-81頁。

«НО ВОТ», «НО все-таки» という訳語があてられているとおり、「だが、見るがいい」という意味で用いられる場合がある⁽⁵⁶⁾。

さらに、動詞 «бысть» も、«быти» の完了体のアオリスト形（不完了体のアオリスト形は «бъ»）である⁽⁵⁷⁾ が、«бъ» は状態動詞として連結（copula）の機能を果たすのに適すが、«бысть» はむしろ動作的に「なった」、「生じた」、「起こった」の含意がある⁽⁵⁸⁾。したがって、完了体アオリスト «бысть» に、「これは ... である」という連結の意味を見出すのはいささか不自然である。

これらのことを考えあわせてみると、ここに従来のように順接を読みとるのではなく、むしろ「だが、見よ」という逆説を読みとるほうがふさわしいように思われる。接続関係を示しながら、後続箇所の試訳を掲げる。

三浦訳

…彼らは地面を掘り、そこにグレープを埋葬したが、それが美しく清浄であることがわからなかった。

だが、見よ、妙なることが、驚くべきことが、記憶にとどめるのに値することが起こったのだ。聖なる人の遺骸はこれほどの年月のあいだ打ち捨てられていたのに、何の損傷もなく、獷猛な野獣に襲われたり、蛆虫がわいたりすることもなく、死者の遺骸がふつうそうなるように黒ずんでさえいなかった。色が白く、美しく、全きままでかぐわしい香りがしていた。神はこのように自らの殉教者の遺骸を保ったのである。

グレープの遺骸が穢れたものと見なす人々がいたということは、当然のことながら、グレープを聖人とすることを記念して作成された文書のなかで、あからさまには語り得なかったにちがいない。しかしながら、疑う者たちがいる以上は何らかのかたちでその疑念について言及し、それを否定したうえで、奇跡がおこったことを強調する必要があったのではないだろうか。そもそもキリスト教は、ユダヤの伝統によって穢れた死者とされたイエス・キリストが復活したという説話に立脚している⁽⁵⁹⁾。また、第2章で見たとおり、『物語』は、『説教』、『年代記』よりはるかに自由な語り口で叙述を展開している。以上のことから、グレープの遺骸は穢れているので教会へ埋葬できないと考える人々が存在したと、『物語』が証言していたとしても、何ら不思議はないと思われる。

56 «се» 3. a) // Slovník jazyka staroslověnského (Словарь старославянского языка). Praha, 1997; «се» 3. a) // Старославянский словарь (по рукописям X–XI веков). М., 1994.

57 木村『古代教会』123頁。

58 H.G. ラントは「完了体は、ふつう «come into being», «come to be», «become» を意味する」と述べている。Horace G. Lunt, *Old Church Slavonic Grammar* (S-Gravenhage: Mouton, 1974), pp. 121–122.

59 たとえば、『ガラテヤの信徒への手紙』3章13節参照。「キリストは、わたしたちのために呪い（呪われた者－筆者注）となって、私たちを律法の呪いから贖い出してくださいました。『木にかげられた者は皆呪われている』と書いてあるからです。『申命記』21章23節によれば、「木にかげられた死体（たとえば、磔刑されたイエス－筆者注）は、神に呪われたもの」であった。引用は、新共同訳『聖書』による。

おわりに

以上をもって筆者は、第1に、「недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ»という一節に、キエフ・ルーシのキリスト教黎明期における、キリスト教と異教の融合の一過程を見ること、あわせて第2に、当該の一節を、「не постигать», «не понимать» という意味を表わす「недоумѣти」の用例の一つとして辞書に登録することを提案する。そして、最後に、この考察をうけて、ボリスとグレープの列聖という事件がもつ社会文化史的意義について一言だけつけくわえたい⁽⁶⁰⁾。

ボリスとグレープの列聖はキリスト教黎明期のロシアにおいて、きわめて大きな意味をもった。それは、「若くして殺されたボリスとグレープが不浄なものとして大地に受け入れられず、この世に戻って害悪をもたらす」という異教的な神話が、「無抵抗でひたすら祈ったことで神に好まれ、祝福され、天上の王国にいる」というキリスト教的な神話に置き換えられることを意味した。

すなわち、ボリスとグレープの列聖は、表面的に受容していたキリスト教を内面化する営為であった。これによって、キエフ・ロシアはつねに虐げられたものの立場に立つというイエス・キリストのあり方に気づき、それを受け入れたのである。ロシアには、政治的敗者を聖者として崇める伝統がある⁽⁶¹⁾。この現象の深層にはつねに、政治的敗者をキリストと結びつけて考えるロシア正教会固有の思潮があったと筆者は考えている。この思潮がはじまったのはまさに、ボリスとグレープの列聖からである。

60 詳細は以下参照。三浦「ボリス」138-152頁。

61 『アンドレイ・ボゴリュプスキイ殺害の物語』、『チェルニーゴフ公ミハイルとその貴族フェオドルのハーン宮廷における殺害についての物語』、『トヴェーリ公ミハイル・ヤロスラヴィチ伝』はこの思潮の端的な現われである。これらの作品には日本語訳がある。三浦「中世ロシア文学図書館 (I)」160-166頁；三浦清美「中世ロシア文学図書館 (III) 中世ロシアの説教① / 非業に斃れた公たち」『電気通信大学紀要』第24巻第1 [通巻40号]、2012年、93-109頁。2000年8月20日にニコライ2世とその家族が列聖されたことも、この伝統に連なる事件であった。

**An Interpretation of
“НЕДОУМЪЮЩЕ, ЯКО ЖЕ БЪ ЛЕПО ПРЕЧЪСТЪНЪ”
in *The Tale of Boris and Gleb*: A Study of the Syncretism
between Christianity and Paganism in Old Russia**

MURA Kiyoharu

This article aims to make an appropriate interpretation of the enigmatic phrase “недоумъюще, яко же бѣ лепо пречъстѣнѣ,” whose proper meaning various scholars have attempted to discern, but on which they have failed to reach consensus.

Found in *The Tale of Boris and Gleb*, the phrase concerned is generally considered to have been written at a certain point between the second half of the eleventh century and the first half of the twelfth century in Kiev, the capital of Rus'. According to the established historiography, Boris and Gleb are the younger sons of Vladimir, who had baptized Rus' in 988. On his death in 1015 violent strife took place over the throne of the Great principedom of Kiev, in which Boris and Gleb were involved and killed by their elder brother, the “cursed” Sviatopolk. Boris was buried in Višgorod, where he had ruled as prince, and the body of Gleb was abandoned in a desolate place. After the death of Boris and Gleb, another elder brother Jaroslav stood against Sviatopolk. He fought against Sviatopolk and his ally Boleslav, the king of Poland. The furious and chronic fighting between their troops went on for four years and finally, Jaroslav overcame Sviatopolk and Boleslav in 1019. Sviatopolk was driven away to death. The murdered Boris and Gleb were later canonized as the first Russian saints by the Kievan Orthodox Church by 1072, when their remains were transferred with great ceremony to a new church in Višgorod, solely dedicated to the brothers. According to *The Tale*, Jaroslav after his victory sought and discovered the abandoned body of Gleb having been abandoned, and buried him once again in a church. The phrase “недоумъюще, яко же бѣ лепо пречъстѣнѣ” appears in this reburial scene.

This article consists of nine chapters. Chapter 1 makes a brief survey of the research history of the literature of Boris and Gleb. The story of Boris and Gleb is featured in the following four medieval works: *The Chronicle Article*, *The Tale of Boris and Gleb*, *The Tale of the Miracles of Roman and David*, and *The Lesson Concerning Boris and Gleb*. Examining the ways in which scholars have fallen into confusion in interpreting the phrase “недоумъюще, яко же бѣ лепо пречъстѣнѣ,” I argue that the word “недоумъюще” with the meaning “not comprehend” makes this phrase puzzling. I propose putting this phrase into the context of the whole structure of the above-mentioned works concerning the tragic death of two brothers.

Chapter 2 provides a variety of descriptions of what actually happened, comparing accounts in *The Chronicle Article*, *The Tale*, *The Tale of the Miracles*, and *The Lesson*. Chapter 3 scrutinizes whether the body of Gleb was buried or not, juxtaposing the accounts of *The Chronicle Article*, *The Tale*, and *The Lesson* and examining their various types of translation. I conclude that the murdered Gleb was actually abandoned in a desolate place.

Chapters 4 and 5 challenge the views of E. Golubinskii's, the generally acknowledged authority on the history of the Russian Orthodox Church. He was bewildered by the interpretation that the body of such a socially high-positioned man as a prince was not buried

but abandoned, even though Gleb was a loser in a power struggle. *The Chronicle Article* and *The Tale* have passages telling of the body of Gleb having been left between two logs on the shore. Identifying the word “logs (колода)” with a hollowed-out log-coffin, E. Golubinskii insisted that the body was buried there. Chapter 5 examines the usage of the word “колода” in medieval literature. In his famous dictionary I. I. Sreznevskii indicated that “колода” meant first of all “log,” and secondly “hollowed-out trunk, used for the burial of the dead.” According to V. O. Kliuchevskii and S. M. Soloviev, however, this type of coffin was an absolute luxury in the medieval era. This fact contradicts the idea of the body having been either abandoned or concealed “in a desolate place” or “on the shore.”

Based on medieval Russian miniatures, Chapter 6 confirms that the body of Gleb was depicted as indeed abandoned. In addition, Gleb was always portrayed without a beard, which illustrates that Gleb was an infant at the time of the incident. Chapter 7 considers what the abandonment of the body of an infant meant in the medieval era. I argue that Gleb was regarded as a *zolozhnyi pokoinik*, that is, a thrown-away deceased. At the end of the nineteenth century on the peripheries, one famous ethnologist D. K. Zelenin observed the custom where the unhappy dead, those killed by violence in youth, were not buried, but abandoned. According to him, the locals believed that the earth would be furious to receive such stained bodies and do people harm; the dead denied burial by the earth would put people in danger. Here, it is possible to see a parallel between such unhappy deceased and Gleb. The people’s fear of Gleb’s vengeance must have been the basis of the cult of Boris and Gleb. Reappraising the structure of *The Tale of the Miracles of Roman and David* and *The Lesson Concerning Boris and Gleb*, Chapter 8 pinpoints six mysterious miraculous episodes demonstrating Gleb to be an “avenging god.”

Chapter 9 attempts to give a possible interpretation of the phrase “недоумѣюще, яко же бѣ лепо пречѣстьнѣ.” I propose the meaning that they did not regard the body of Gleb as pure; they buried his body with great anxiety. To conclude, I contend that the canonization of Boris and Gleb was a unique religious phenomenon indicating the syncretism between Christianity and paganism in the early period of Kievan Rus’. By canonizing the two tragic young brothers, the people intended to overcome their dread of the vengeful dead.